

実習田で多収研究

～長野県須坂園芸高校

初夏の装いを見せた5月28日、水稻1トン取りで名を馳せた長野県須坂園芸高校（校長：小椋勇人先生）の田植え実習をレポートする。同校は2009年、2010年に須坂市内の塩川実習圃場において、キヌヒカリで10a当たり玄米収量1トン収穫を達成し話題となった有名高校だ。須坂市は長野県の北信地区にあり、ぶどうやりんご等の果樹における産地として名高い。また須坂は水稻栽培においては多収穫出来る地域となっており、キヌヒカリでは普通に作っても平年10俵超えは当たり前という、とても恵まれた地域だ。須坂園芸高校では農業経済科流通経済コースの実習として、水稻と麦の栽培が指導されている。農家の高齢化が進む中、また米価が下落する中で生徒にコメの収量を増やす技術を教える事は大きな意味があるとして、本年は農業経済科2・3年生の田植え実習でコシヒカリと風さやかなの多収穫に取り組みを開始した。水稻栽培の指導は竹元幸一教諭が行っている。竹元先生に多収穫のコツを聞いた。

竹元先生が聞き取り調査をした結果、多収された多くの方の体験談として密植、多肥が基本となっているようだ。現在では疎植栽培が主流となっているが、1トン取りを達成した時も密植・多肥栽培で達成されている。また、水稻の特性でケイ酸を効かすことも必要ではないかとされており、各種のケイ酸資材を試験で使用したとの事。現在はケイ酸カリの成績がよく、水稻の生育中も長く効いているのではないかと推論し、基肥と一緒に施肥しているようだ。試験圃の特徴はCEC（陽イオン交換容量）が水田にしてはやや高く22.5me/100g、遊離酸化鉄含有量も2.67と高く秋落ち現象は見たことがないそうだ。本年度の試験概要として供試肥料は基肥全量施肥で、窒素は即効性タイプの硫酸と比較対照区として緩効性30日タイプの窒素肥料を10a当たりコシヒカリは4kg・7kg区、風さやは8kg・10kg区としリン酸6kgは過磷酸石灰を使用、カリ6kgは塩化カリ使用、ケイ酸カリは25kg、発酵竹粉（一部の区のみ施肥）36kgを10a当たり全区に使用し栽植密度は22.2株/m²、1本当たりの植え込み本数は各品種ともに3本と6本植えで設計されている。全国的にはまだ聞きなれない風さやかなを供試品種として採用。採用理由としては長野県でも近年高温障害による被害が報告されているため、高温耐性がある品種として県内でも徐々に作付されている有望品種であるからだ。コシヒカリと比較して中生の晩でほぼ出穂期は同じであるが、草丈はコシヒカリよりも短かんで栽培しやすく、多肥栽培でも採れるのではないかと期待している。（次ページへ続く）



(前ページより続く)

さて、当日の田植え実習はいかにもオーソドックスな方法で圃場に生徒37名が一行に並んで入り、とんぼでマーキング、指定された植込本数を手で丹精込めて植えこんでいった。1267㎡ほどの圃場だが朝9時半に出発し夕方になるまで作業が掛かり、先生たちのご苦労が伺えた。田植えを経験したことがない生徒さん達が大多数で、田んぼを歩く事がままならず、足を取られてしまう生徒達の黄色い声が田んぼ内に響き渡る楽しい実習風景であった。農業経済科は簿記資格取得を目指した生徒が集うせいかな生徒の多くは女生徒達。時折行われる雑談もうら若き元気な生徒達に先生方は圧倒！？されていた様子であった。圃場横はりんご畑と長電が走る、のどかな場所。今年は何れだけ採れるか楽しみだ。これから収穫まで順次レポートする予定なので皆様、須坂園芸高校の生徒達の奮闘ぶりにご期待ください。

全肥商連 飼料用米研修会 開催

去る6月2日、都内の日本教育会館にて一般社団法人全国肥料商連合会主催の飼料用米研修会が開催された。講演は2部構成で1部は農水省生産局 農産部穀物課企画班より「飼料用米の推進上の課題と解決に向けた取組について」、同省畜産部畜産振興課より「畜産における飼料用米の利用の現状と推進に向けて」、独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 作物研究所 稲研究領域 稲育種研究分野 上席研究員

飼料用稲品種開発プロジェクトリーダーの石井卓朗農学博士より「飼料用米品種の特性と開発状況」について説明がなされた。2部では実際の飼料米を扱う飼料メーカーの意見として

中部飼料株式会社 研究技術部 近藤祐司執行役員 研究技術部長より「飼料用米の実際と将来展望」と題して飼料の栄養価や飼料メーカーの飼料米に対する考え方について解説頂けた。

農水省担当官の説明に対して参加者からは意見と要望がなされた。意見としては、飼料用米の補助金申請についてどこの部局に聞いたらよいか分からずPR不足ではないかという指摘や、飼料米を取り組む方針がない農協については職員が制度そのものを理解していないため、連携が出来ないなど地域によって温度差があるとの事。また、本年度産の新規需要米の種子確保がままならなかった事、商系の肥料商は飼料米の売り先の確保が未整備である場合が多く、系統組織との差が拡大することに対して懸念が聞かれた。飼料米を集荷した場合、一般主食米と比較して飼料用米の売り渡し単価が低いいため、生産者から手数料や検査料、保管料が取れないのではないかと行政からの支援が欲しいとの要望もなされた(流通業者に対する支援は考えていないとの回答)。さらに、出来秋までに日本穀物検定協会にて飼料用米の検査員の資格を取得出来るよう講習会を実施するなど慌ただしい動きとなっているようだが、そのアナウンス状況が周知徹底なされていない事に対する意見が出た。石井博士からは今後の飼料米の新品種作成についての方針が聞かれた。粗玄米収量で10アールあたり1MTを超える安定多収が出来るもの、病虫害抵抗性の強化(イモチ病耐性・ウンカによる食害耐性)した新品種を近々上市予定されているようで期待したいところだ。

第2部では飼料米の現状、飼料会社の実情とTPP発動を睨んだ畜産業界の動きを紹介して頂けた。飼料会社の戦略としては国産の飼料米を使うことで安心・安全をアピールし、消費拡大に繋げていきたいとして、飼料米の増産要望がなされた。飼料工業会においても飼料米ダイアルの設置や飼料米生産者からの相談も積極的に受けていきたいとされている。商系流通業者が飼料米を斡旋出来るか、今後の動きに注目したい。



梅雨入りした矢先に、6月ひと月分の雨量を記録する大雨が降るなど、極端な天候に今年も悩まされるのかと心配です。更にこの時期に心配なのが食中毒。家庭内におけるポイントは「付けない、増やさない、殺菌する」。ちょっとした心がけで、予防したいですね。 編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp